

飛鳥「石」めぐり紀行

喜多 一雄

Kazuo KITTA

【はじめに】

奈良県高市郡明日香村をはじめて訪れたのは、もう四十年近くも前の少年の頃であった。それ以来、飛鳥の地ことは常に気になっていた。

五年ほど前より年に二回、八月・十二月に明日香村を訪れるようになった。明日香村の田園地帯は、その季節によって全く別の顔を感じさせてくれる。その時々で行動範囲も時間もまちまちであったが、飛鳥を体感すべく、なるべく徒歩での散策を心掛けてきた。

その散策の中で頻繁に出会っていたものがある。人の手により加工された「石」である。はじめのうちは気に留めなかったが、飛鳥

には実に様々な「石造物」がある。古墳の石室もある意味立派な「石造物」であるし、ごく最近になって建立された万葉集歌碑も石造物である。さらに、実に多くの謎の石像に出くわすこともある。これらを何度も目にするようになると非常に気にかかるようになってきた。

現在、飛鳥の地は平成十九年より、藤原宮都跡とともに我が国の暫定一覽表記載文化遺産（いわゆる世界文化遺産推薦待ち暫定リスト）に入っており、世界遺産への登録が待ち望まれている。国土交通省ではこの地に、広大な国営飛鳥歴史公園を設け、五か所の区域に分けて整備している。その五か所とは、

高松塚周辺地区

甘樫丘地区

祝戸地区

石舞台地区

キトラ古墳周辺地区

である。今回はそのうちの二か所、高松塚周辺地区と甘樫丘地区、さらに歴史公園の範囲からははずれるが、飛鳥寺周辺の散策の中で出会った様々な「石造物・石像」について紹介してみたい。

【高松塚古墳壁画】

近鉄吉野線の飛鳥駅を降りると、なにか実家に帰ってきたような郷愁、あるいは既視感のようなものが感じられる。ここ数年の訪問がそうさせたのかもしれない。駅正面の県道を歩くこと十分で飛鳥歴史公園館に着く。公園館の中にはこれといった展示物などはほとんど無く、あるのは地域の立体模型のみで、何のための「館」なのか不明である。受付には人が座っているが仕事はなさそうである（あくまでも私見である）。事業仕分を潜り抜けたようだ。パンフレットやチラシだけを収集することとした。

公園館を出て正面のトンネルをくぐる（車道の下をくぐり向う側



写真①

に出るといふ横断歩道の代わりである）と丘を登る階段がある。膝の痛さを我慢して十五分ほど登ったり歩いたりして高松塚壁画館に着く（写真①）。ここで第一の石造物との出会いである。ここには、高松塚古墳の石室壁画を忠実に模写したものと、壁画のある石室を盗掘抗からのぞく形で復元した「石造物」が展示してある。壁画の復元には日本画家の方たちが多数参加したようであり、その忠実さには驚かされる。石の表面に残ったカビや壁画の剥離状態まで忠実に復元してある。こちらには、入館料徴収のための人員が配置されているが、その価値はありそうだ。

【万葉歌碑】

壁画館を出ると正面に小さな人工の丘が聳える（写真②）。高松塚古墳そのものである。

この中の石室に女子群像をはじめとした壁画が残っていたのである。

その脇に一段高い展望台があり、そこには万葉歌の石碑が据えられていた（写真③・④）。

立ちて思ひ 居てもそ思ふ 紅の

衣裳裾引き 去にし姿を

第十一卷 二五五〇

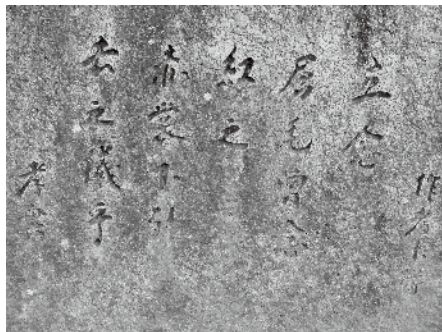
作者は未詳である。



写真③



写真②



写真④



写真⑤



写真⑥

「今はもう去ってしまった紅色の装束のあなたの姿は、立っていても坐していても思いだされ、私は居ても立っても居られない。」
 という解釈であろうか。男性が女性を思うこの歌がこの地この場所
 で詠まれたのではないことはおそらくまちがいないであろう。しか
 かし、紅の装束を身に着けた女性を思う気持ちも詠んだこの歌碑
 は、石室壁画に紅の装束の女子群像を持つこの高松塚こそが最も
 ふさわしい場だと思う。

【鬼の雪隠・鬼の俎】

飛鳥歴史公園館にもどり、脇の細い道を抜けて丘を登ると、人工
 石造物の「鬼の雪隠・鬼の俎」に着く。(写真⑤・⑥) 雪隠、つま



写真⑦

り鬼の使用したトイレと、鬼が獲物の村人を調理したまな板だという意味である。もちろん、たくましい想像をめぐらした結果のネーミングであるが、古代人の想像力の豊かさを思わせてくれる。実際のところは、台地上に鬼の俎があり、道を挟んで反対の低地部分に鬼の雪隠があることから、台地上の古墳石室の上部（雪隠部分）が何らかの原因で崩壊して台地の下に落下したものらしい。

【亀石】

さらに道を進むと謎の石像、通称亀石がある。（写真⑦）おそらく誰がどう見ても亀である。何の目的で造られたか定かではないが、湖の水を抜いてしまったために死んでしまった多くの亀たちの

供養であるという伝説があるようだ。「湖」とはまぎれもなく、あ
の水を湛えた「みずうみ」である。

飛鳥地方から見て北西部にあたる大和盆地の一部には、かつて「大和湖」なる湖が存在していたと、國學院大學名誉教授・故樋口清之氏は唱えていた。（昭和五十三年 千曲秀版社刊『大和の海原』）大和盆地周辺の縄文遺跡は標高およそ六十五メートル以上にみられ、弥生遺跡はおよそ五十メートル以上にみつかるといふ。この標高は、当時の湖が縄文人・弥生人の生活を阻害していた証明であるという。確かに、周辺の山から盆地に向けて多くの河川が集まっており、盆地底部に湖沼が存在したことも、地形上うなずける。近年は否定的な見方もあるようだが、少なくとも湿地帯はあつたようである。

伝承のなかに史実が垣間見られることは多々あると思う。現在南西を向いている亀が西を向いたとき、ふたたび大和湖が現れるという伝承も残っている。飛鳥川をはじめとする河川の氾濫を反映した伝承ではないだろうか。

【二面石】

亀石から県道へ出て東に進むと橘寺がある。厩戸王生誕の地に自身が創建した寺院と伝えられる。その境内に二面石なる石像がある。（写真⑧・⑨・⑩）巨石の左右両面に人面が彫像されている。右側（写真⑨）が善面で、左側（写真⑩）が悪面という。



写真⑨



写真⑧



写真⑩

しかし、筆者には逆に思えて仕方がない。右側の大きく口をあげた相は自己主張の強い我儘な人間性が感じられる。一方で、左側の何とも情けなげな相は人の好い性格を想起させる。しかし、伝承は逆なのである。

これは想像であるが、表面的な人相の裏には隠された真の心が存在し、表の顔だけでは人間というものは理解できない、という教えないのかもしれない。

【飛鳥坐神社】

橘寺から北に進むと飛鳥坐神社（あすかにいますじんじや）がある。鳥居をくぐると石段が長く続いており、本殿は遙か上のほうである。思えば飛鳥は土地の高低差が激しい。歩いての散策は骨が折れる。いや、膝に水がたまる。（膝の中の亀が西を向いたのかもしれない）

石段を登って一息つける踊場に出ると、そこには「力石」なる謎の加工石が鉄柵に閉じ込められて置いてある。（写真⑪）

添え書きを読むと、男性は左手で、女性は右手で、片方の手だけで持ち上げられれば幸福が訪れるという。

幸せになりたい一心で持ち上げてみた。写真でお分かりの通り、手を入れる部分が小さく、そのわりに石は大きく、重く、しかも滑る。摩擦で持ち上げられないようにわざと加工してある（これは古代人ではなく現代人の意地の悪さである）。腕力だけではだめだ。



写真①

握力で強く掴まなくては石は持ち上がらない。あきらめかけたが、何とか持ち上げることができてほっとした。さらに石段を登り本殿に参拝ののち、帰りも持ち上げてみた。今回も何とか持ち上げるこ
とができた。幸福が訪れると確信した。実際、四十三日後に幸運が訪れたのであった。これはチャレンジすべきだ。でも、左利き男性は有利ではないか。左利き男性は幸運が多いはずだ。本校のI・H先生をはじめとして。

【飛鳥寺・蘇我入鹿首塚】

飛鳥坐神社からほど近くに、蘇我馬子創建による飛鳥寺がある。現在は小さな寺院であるが、かつては広大な領域に大伽藍を広げ、



写真②

五重塔をも備えた大寺院であったという。現在は塔など残っており、鞍作鳥の作による飛鳥大仏と呼ばれる釈迦如来坐像（写真②）が残るのみである。

この釈迦如来像は昭和十五年に国宝指定を受けている。しかし、昭和二十五年の文化財保護法により、全国の国宝は一旦、国宝指定をはずされて重要文化財となった。その後、再度の審査を受けて国宝に昇格した文化財があるものの、この釈迦如来像は国宝に昇格することはなかった。後世の補修の多さが原因である。国宝昇格への運動もしていたようだ。



写真⑬

しかし、近年の調査によって、後世の補修と考えられていた部分も造立当時のものである可能性が指摘されている。もしかすると、今後再度国宝への復活も夢ではないのかもしれない。

この飛鳥寺の裏側に、石造の蘇我入鹿首塚がある。(写真⑬)権勢を極めた蘇我氏の御曹司であった蘇我入鹿は、乙巳の変によって殺害された。甘樫丘に居宅を構え、大和三山や周辺の皇居をも見下ろした当代一の権力者としてはあまりに寂しいものである。何と、これが入鹿首塚であると示している碑文や標識などは何一つないの

である。ただ、ぼつんと飛鳥寺の西門の外に残る石を積んだ塔は、西側から来た人には、これが何物なのか全くわからないほど、寂しい慰霊の碑である。蘇我氏を倒して成立した政府がこの後永らえて、歴史を構築していったことを考えると、やむを得ないことなのだろうか。

【おわりに】

『日本書紀』の記載は、蘇我氏の、特に入鹿の強引な政權運営が、蘇我氏滅亡の原因であると思わせるが、そうした『日本書紀』の記述の信憑性を疑う議論が行われている。厩戸王のことを聖徳太子と呼び神聖視する考え方も疑念が持たれはじめた議論がなされている。厩戸王は現在の教科書では、推古天皇の「協力者」となっている。

かつて筆者が高校に通っていたころの教科書(昭和五十四年ごろ)と、教壇に立ち授業をおこなうようになったころの教科書(昭和六十一年ごろ)、そして現在(平成二十六年)導入の新学習指導要領に則った課程の教科書。みな様変わりしている。特に現在の教科書は新出用語が多く、従来と比べてかなり様変わりしている。

筆者が飛鳥で出会った「石」たちは、数百年の年月を経ても大きく変わることがないだろう。しかし、それらを史料として歴史を解釈し、組み立てられた歴史像は時として変化していく。さらに歴史はどんどんと新しい事実が積み重ねられて、その内容はさらに豊か

になつていく。

そんな歴史を後世の若者たちに伝えていく使命を与えられたわれわれ指導者は、石造物のように不動の部分を基礎として持ち、その上に生じた苔のような柔らかい流動的な部分をともに兼ね備えて指導にあたらなければならないと考えさせられた。